
視覚障害者に対する中高生の意識 ～意識調査を通して～

日本ライトハウス

川原田久美*

1. 調査の概要

1) 調査目的

佐藤（1991、Pp.92）は「社会の人々の視覚障害者への態度の中核は、拒否と当惑を示す非好意的なものが多いともいわれる」、また「社会の人々の態度は（中略）視障者の日常活動を疎外する否定的行動を引き起こす一原因になっていることは想像に難くない」と述べているが、こういった社会の人々の態度は視覚障害者（以下、視障者と記す）が社会参加する上で大きな障壁となる。そこで、少しでも社会の人々に視障者を理解してもらうために、我々がどのように社会への啓発をしていけばよいかを今回の調査を通して考えたい。

2) 調査内容

調査の主な内容は、視障者に持つイメージ、視障者との接触経験、白杖・盲導犬・音響信号・視覚障害者誘導用ブロック（以下、点字ブロックと記す）・手引きについての周知度、視障者の単独歩行についてである。

3) 調査対象及び方法

対 象：中学1年生～高校3年生（12歳～18歳）

協力校：明石市立二見中学校1～3年生、232名

大阪府立山田高等学校1～3年生、236名

（性別：男223名、女240名、不明5名）

調査方法：各学校にて調査用紙を配布、回収してもらった。

* かわはらだくみ 日本ライトハウス第2生活訓練部 〒538 大阪市鶴見区今津中2-4-37
電話 06-961-5521 FAX 06-961-6268

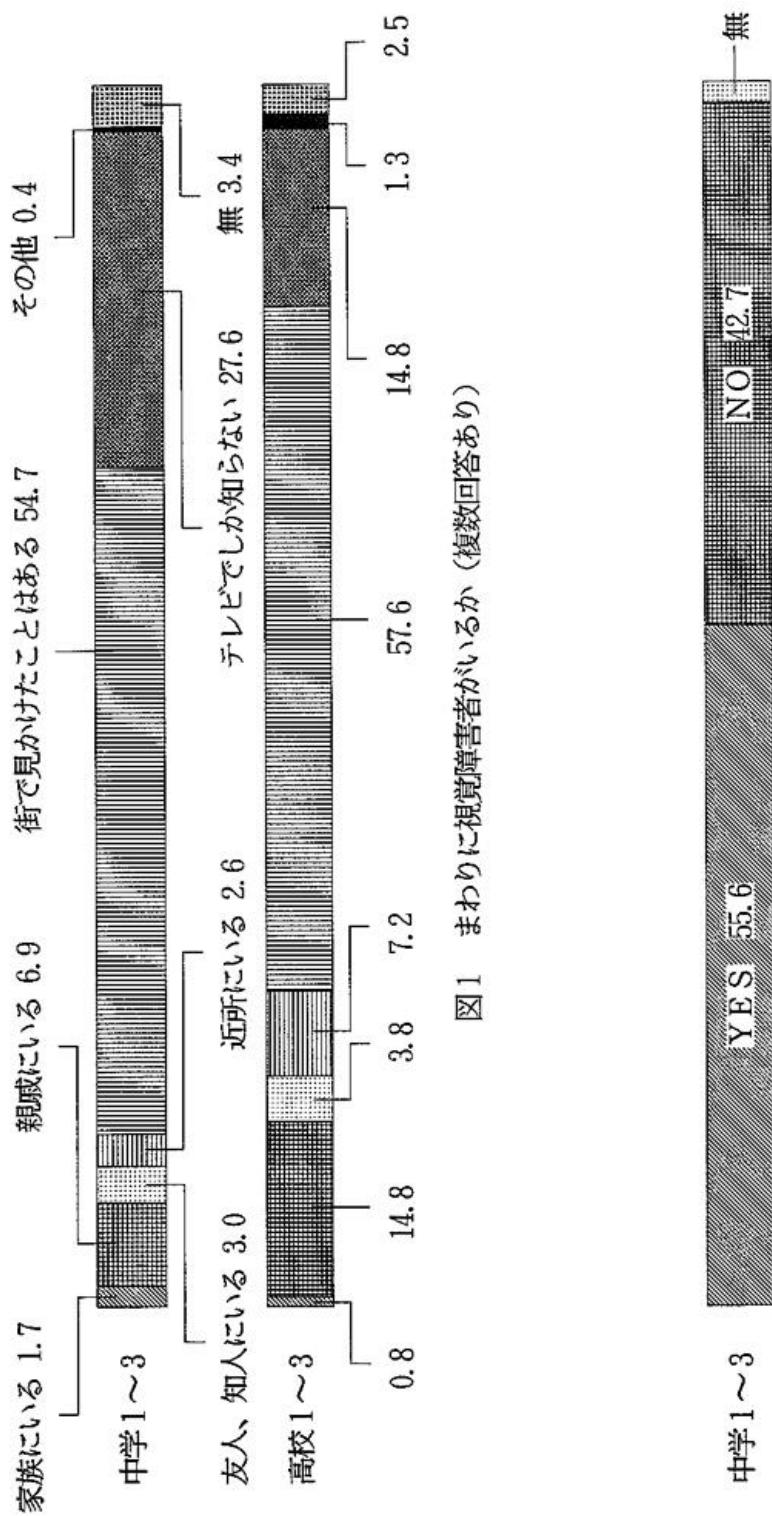


図1 まわりに視覚障害者がいるか（複数回答あり）

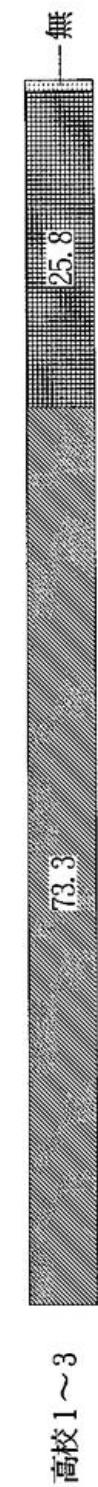


図2-1 出会ったことがあるか

調査期間：平成8年7月1日～7月11日

回収件数：468件、うち無回答3件

2. 調査結果と考察

1) 視覚障害者に持つイメージ

視障者にどんなイメージを持っているかを自由に書いてもらった。その回答の中から同じ単語を拾い上げてみた。多いものから順に、「かわいそう」96個、「大変」82個、「不便、不自由」49個、といったものであった。具体的には、その単語だけを書いている人、きれいなものや人の顔が見れなくてかわいそう生活や歩くのが大変と、どうしてそう思うのか、どういう部分をそう思うのかなどを書いている人がいた。

この結果から「かわいそう」が一番多かったのだが、佐藤（1991、Pp92）は「視障者に対し社会の人々が表明する態度の中でもっとも一般的なのは「哀れみ」ないし「同情」である」と述べていて、まさにそのことを象徴しているかのようである。さらに、佐藤（1991、Pp92）は「しかし、それだけが人々の態度を支配しているのではなく、それとは独立した部分があることも事実である。つまり、「哀れみ」という感情的部分では異なる態度を持つ人でも、喜んで社会的関係を持ちたいと思うかも知れない。接触しようとする意欲と、哀れみの感情とは、態度の中で互いに独立した部分であると解釈できる」としている。ただ、この調査ではかわいそうと思っていながらも接触しようとする意欲があるのかまでは詳しく分析できなかった。

2) 視覚障害者との接触経験

(1)あなたのまわりに視覚障害者はいますか？

図1は身近に視障者がいるかを表している。「街で見かけたことはある」が54.7%前後と一番多かった。「親戚にいる」という項目の数値は中学6.9%、高校14.8%であり、本徳が1993年に大学生対象に実施した調査（本徳、1994）の結果2.3%と比較すると高いように思われる。これは、今回の調査用紙の記入方法が少しわかりにくかったためか誤解した人がいたためかもしれない。ただ、親戚にいるとした人のうち、接する機会があると回答したのは5.9%であっ

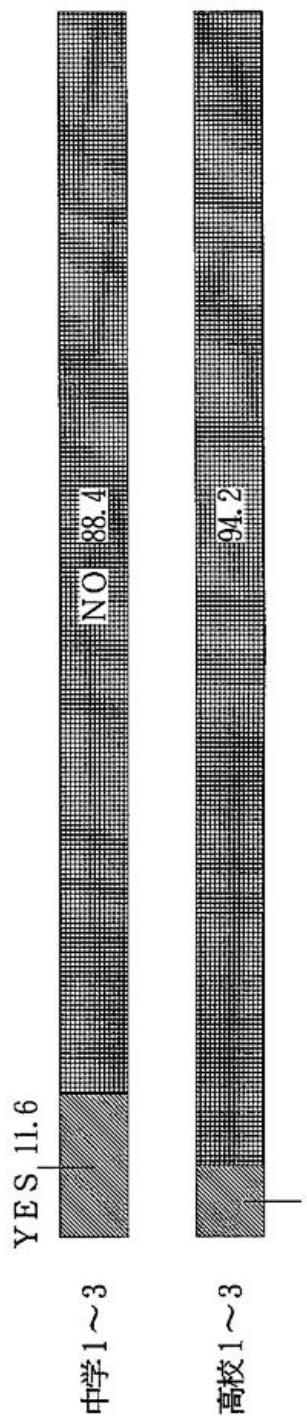


図2-2 図2-1でYESとした人が声をかけたかどうか

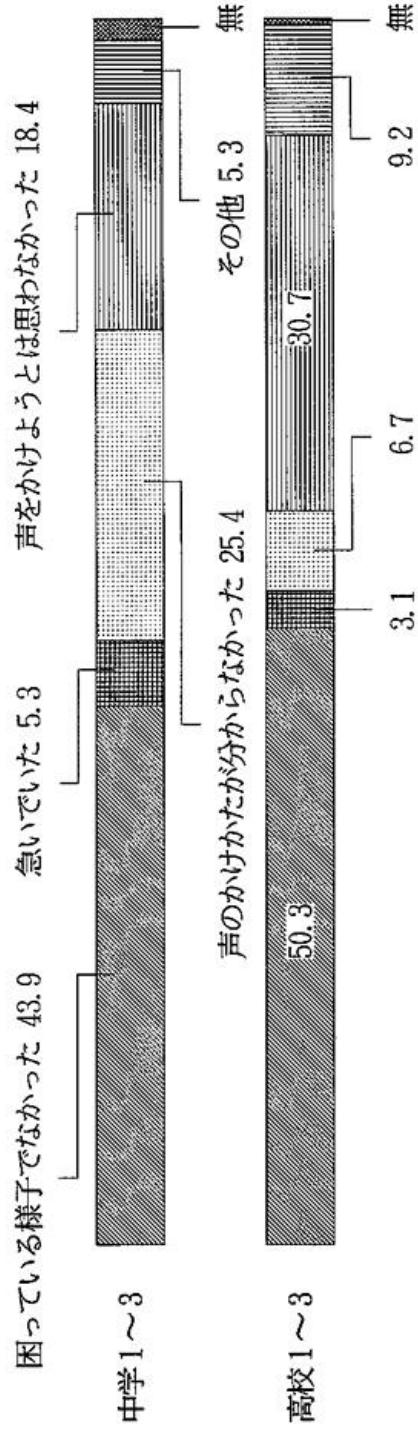


図2-3 図2-2でNOとした人が声をかけなかつた理由

た。また、近所にいるとした人のうち、話をすることがあると回答した人は13%であった。

(2)街で視覚障害者に出会ったことがありますか？

図2-1は「街で視障者に出会ったことがあるか」の質問に対する結果を表している。中学55.6%、高校73.3%がYESとしているが、その時声をかけたかどうか（図2-2）は中・高と差はあるものの、わずか、それぞれ11.6%、5.8%程度である。声をかけなかった理由（図2-3）として、「困っている様子でなかった」が中学43.9%、高校50.3%と多い。確かに、街で視障者に出会うことがそれほど頻繁にはないだろうし、その中で偶然出会い、その時が必ずしも視障者が困っているとも考えられないことがその理由となろう。理由の中で、「声のかけ方がわからなかった」という人は思ったより少なく、中・高と差はあるが、それぞれ25.4%、6.7%であった。

その他の理由としては（中学5.3%、高校9.2%）、「知らない人だから」というのが多く、残りは「人と一緒にいた」、「他の人がすでに声をかけていた」というものであった。注目したいのは、「声をかけようとは思わなかった」とする人（中にはその必要性を感じなかった人もあるかもしれない）や「知らない人だから」といって他人事のように無関心である人が少なからずいるということである。これは、視覚障害者に会ってそう思うというのではなく、困っている人がいても自分のことではないから関わりたくないといった今の社会の人々の気持ちが表れているのではないだろうか。

視障者に会ったことのない人がもし、街で会ったらどうするか（図2-4）では、中・高で差はあるが、それぞれ3.0%、1.6%しか積極的に声をかけると回答していない。声のかけ方がわからないとする人がこれも中・高の差はあるが、それぞれ44.4%、18.0%であり、会ったことがあり、声をかけなかつた理由としてそれを選んだ人（図2-3）よりもかなり多くなっている。これは、会った経験がないため視障者への戸惑いが大きいのではないかと考えられる。

(3)白杖・盲導犬・点字ブロック・音響信号・手引きの周知度

図3～7は、それぞれがどの程度知られているかを表したものである。

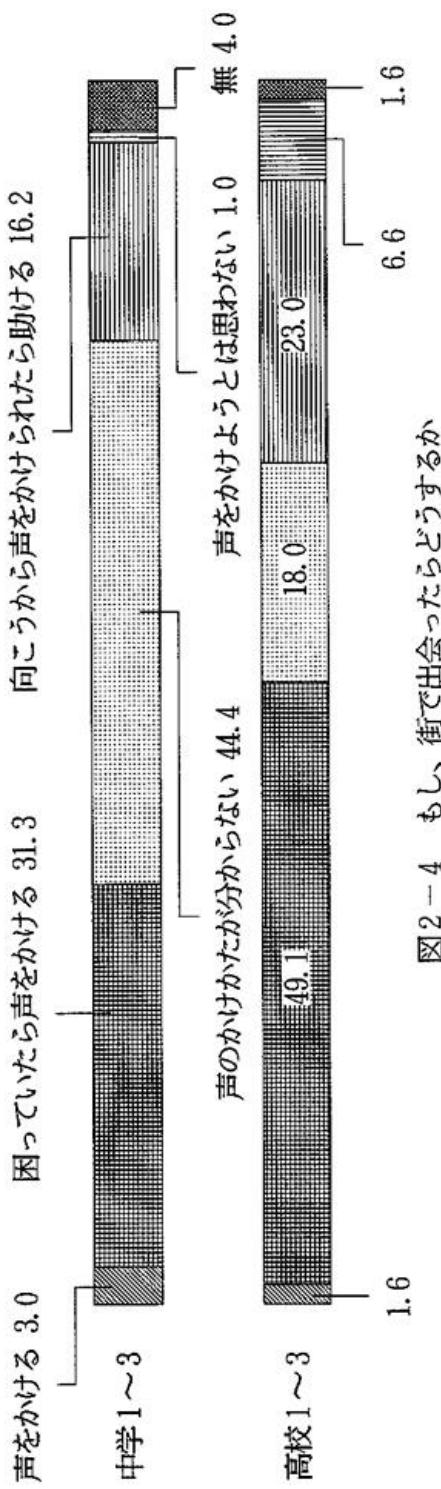


図2-4 もし、街で会ったらどうするか

実際に使っているのを見たことがある 37.5 テレビなどで見たことがある 27.2

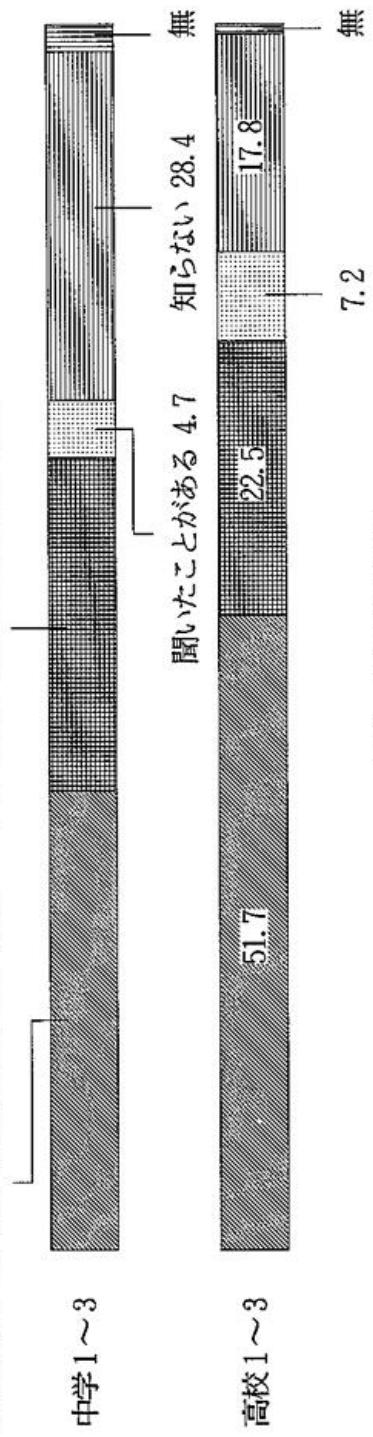


図3 白杖について

白杖について（図3）は、中学69.4%、高校81.4%が実際に使っているのを見たことがあるなど、白杖を知っていると回答している。これは、前出の大学生対象の調査（本徳、1994）の82.2%と比較しても大きく差はない。

盲導犬（図4-1）はマスコミなどで取り上げられ注目されることが多いからか、「テレビなどで見たことがある」とする人が、中学61.6%、高校66.1%と多くなっている。また、盲導犬をどういうものだと思っているか（図4-2）では、「盲導犬がいれば、行きたいところに行くことができる」と考える人は、中学35.2%、高校24.1%で、「盲導犬を持つ人が目的地への行き方などを分かっていなければならない」とした人は中学55.6%、高校61.2%であった。その他として、少し誤解されているものもあるが、「範囲が限られてしまう」、「お互いの信頼・協力」、「きちんと連れていってくれるか心配」といったものが見られた。

点字ブロック（図5-1）では「知らない」とした人が、中学8.6%、高校5.1%であり、大学生対象の調査（本徳、1994）2.2%よりやや多い。これは、街で見かけているとは思うが、点字ブロックという言葉自体を知らないのではないかと思われる。図5-2～図5-7は点字ブロックの理解度を表しているが、約30～40%が「視覚障害者は点字ブロックがあれば必ずその上を歩くと思う」と回答し、また、中学35.9%、高校21.6%が、「視覚障害者は点字ブロックがどこにあるか知っていると思う」と回答している。

「点字ブロックがあると安全に歩くことができる」と回答しているのは中学で47.8%なのに反して高校では14.4%であった。「点字ブロックのある場所を教えてあげればよい」と思っている人が中学52.2%、高校37.8%で大学生23.5%（本徳、1994）と比較するとかなり多いことがわかる。「敷設基準が全国で共通している」と思っているのが中学47.8%、高校37.8%、さらに、「色が黄色であるのには理由がある」と思っている人は中学36.8%、高校30.6%で、「わからない」とする人が中学47.8%、高校62.2%と半数前後を占めた。全体を通して、点字ブロックについてより適正な理解をさらに求めていく必要があろう。

音響信号（図6）では、中学90.9%、高校95.3%が知っており、知名度の高さを示している。

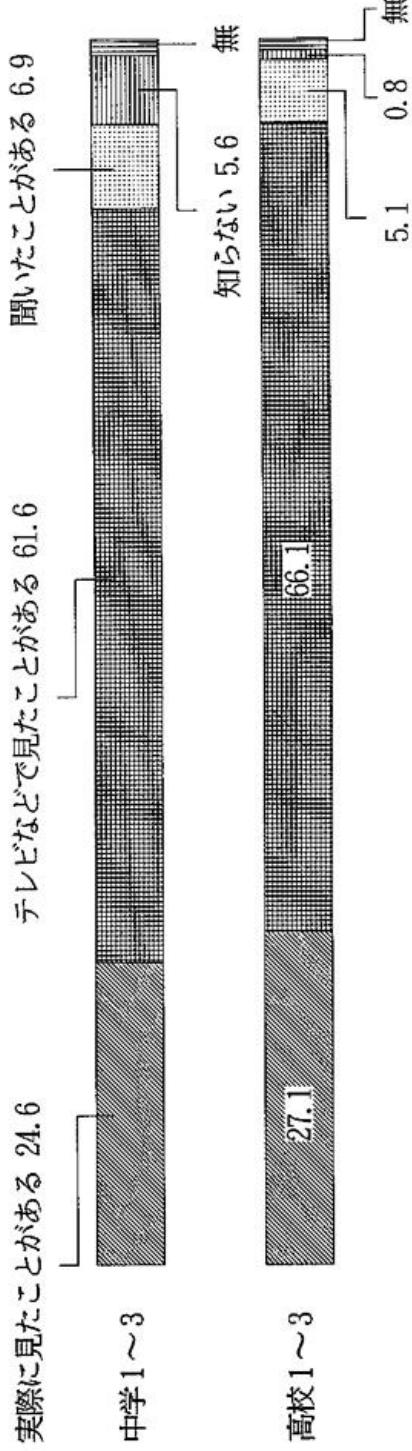


図4-1 盲導犬について①

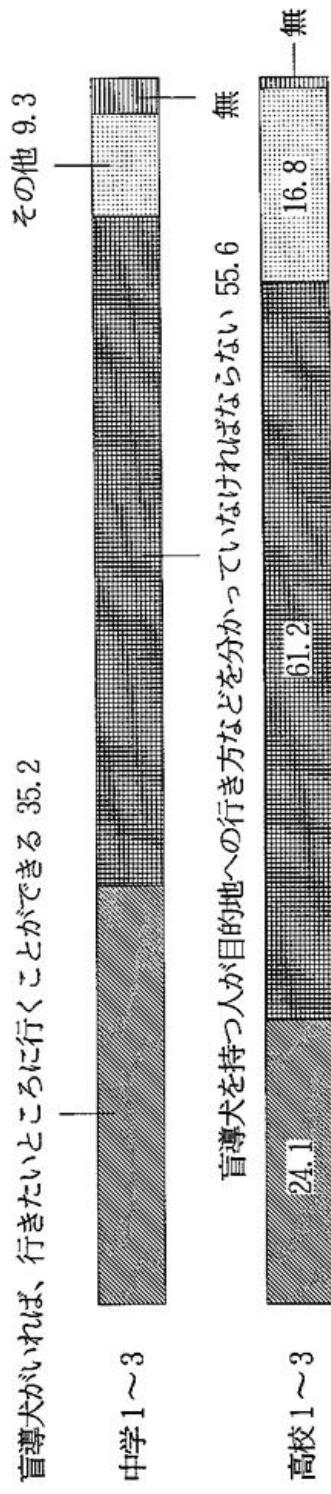


図4-2 盲導犬について②（複数回答あり）

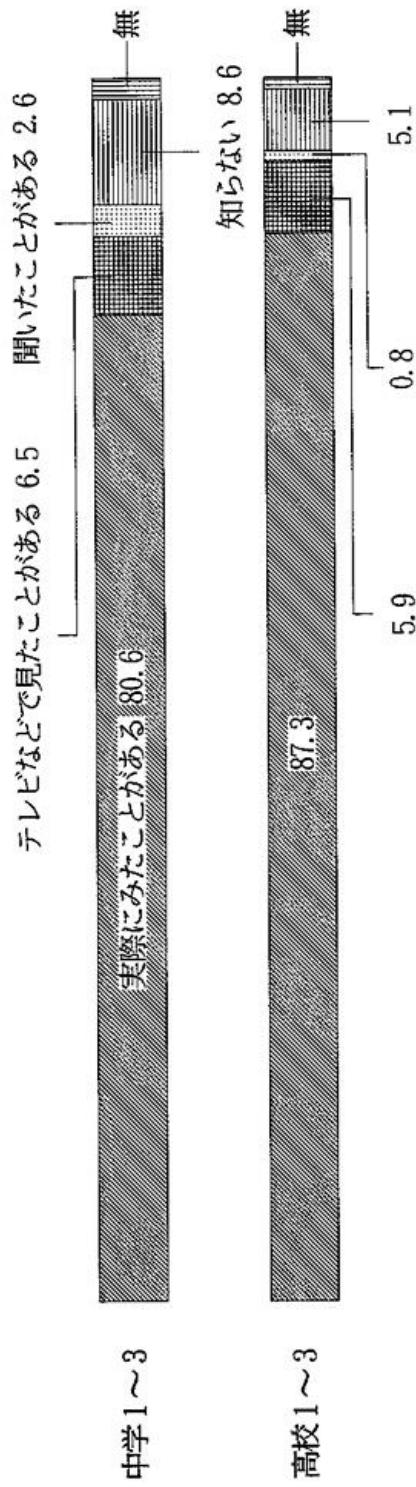


図5-1 点字ブロックについて

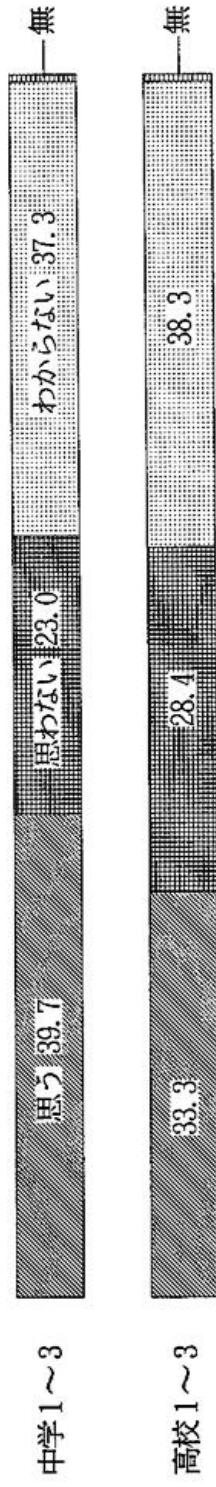


図5-2 点字ブロックの上を必ず歩く



図5-3 視覚障害者は点字ロックがどこにあるか知っている

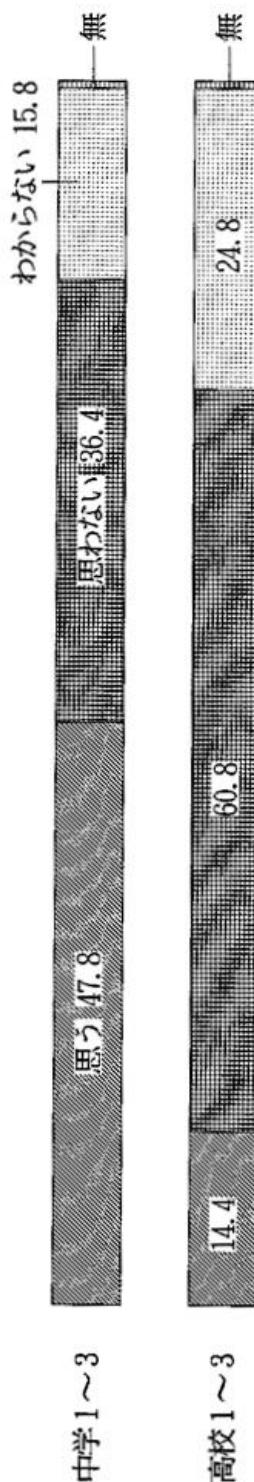


図5-4 点字ロックがあると安全に歩くことができる

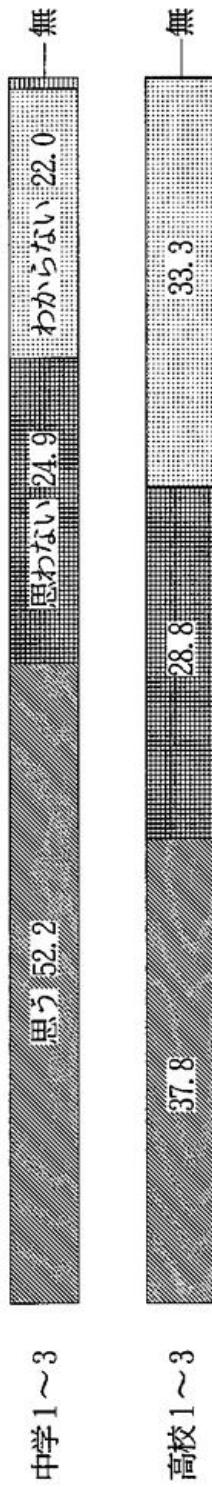


図5－5 点字ロックのある場所を教えてあげればよい

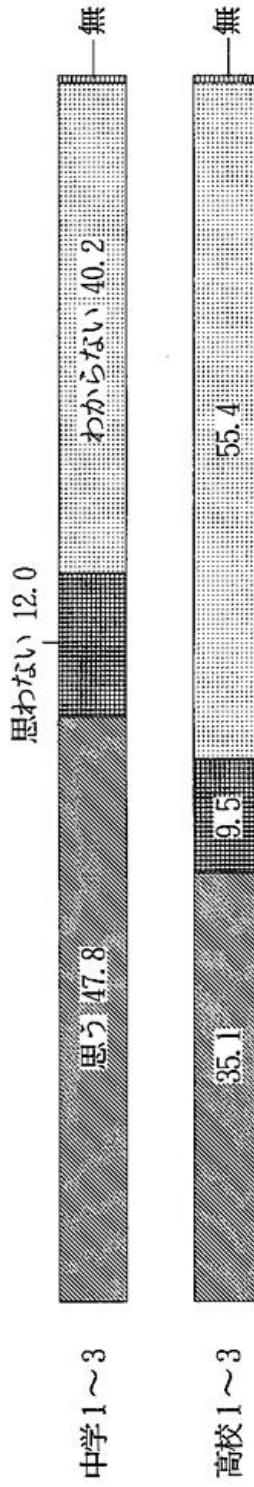
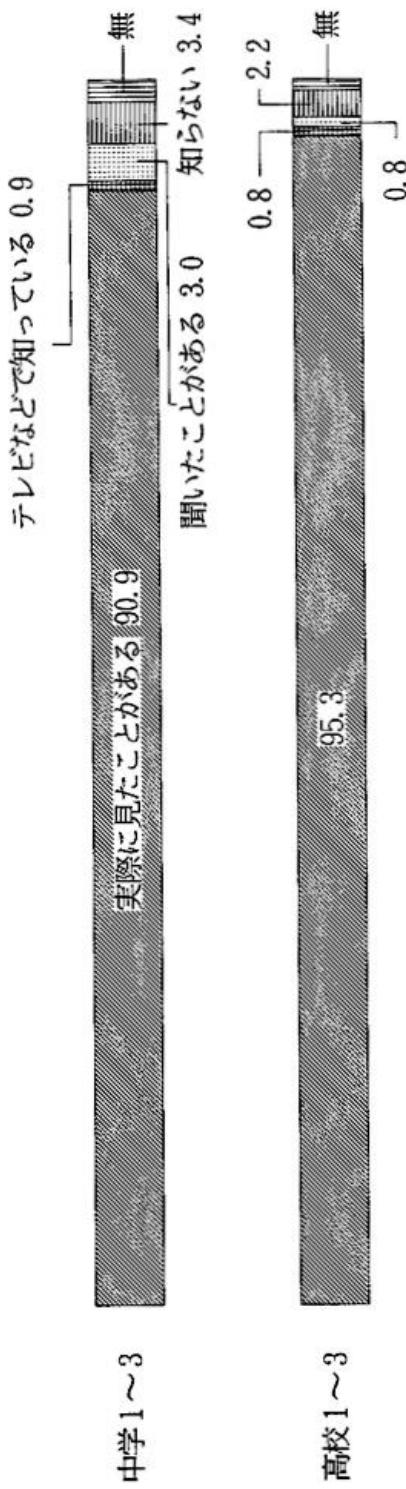
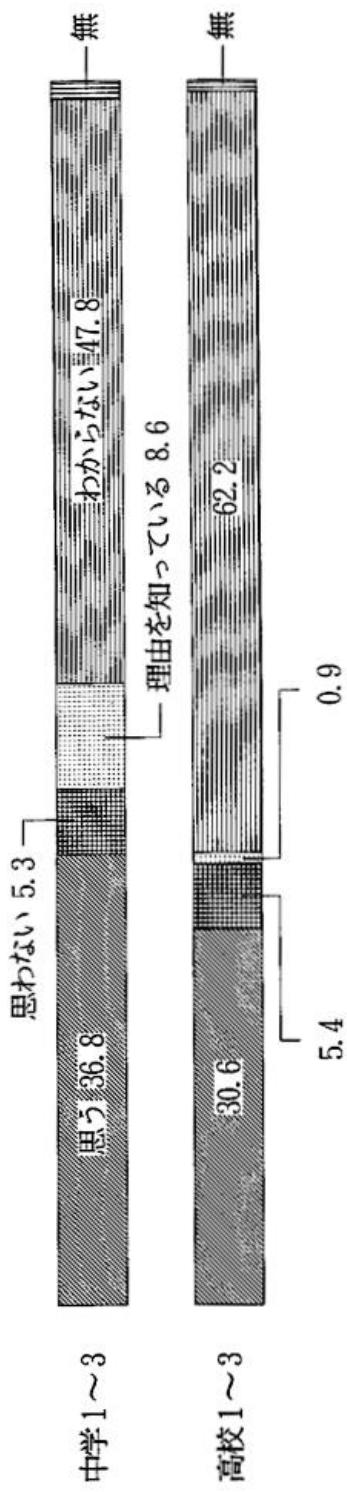


図5－6 点字ロックをつける基準は全国で共通している



手引き(図7)では、中学55.6%、高校47.1%が何らかの状態で手引きを知っている、実際にしたことがある人は中学生13.8%、高校生4.7%であった。学校の授業、子供会、福祉のサマースクールで知ったというのが多く、中学生の方が多いのは高校生には見られなかったその地域での子供会やサマースクールで経験していたからである。「知ってはいるが、したことはない」という人の中には、テレビで見て知っている人が多かった。

(4) 視覚障害者が一人で街を歩くことをどう思いますか？

図8は「一人で街を歩くことについて」の結果を表している。「理解して声をかけるようにしていく必要がある」が中学57.3%、高校52.1%で、「誰かと一緒に歩いたほうがよい」としているのが中学37.9%、高校43.6%であった。目が見えないのに歩くというのは怖いとか危ないという気持ちが背景にあるからであろうと考えられる。

3.まとめ

今回対象とした人達の中には、学校や学外で手引きなどの体験をする機会を持っている人がいた。その地域にもよるが、このことは以前ではあまり考えられないことであろう。それだけ最近は、徐々にではあるが、社会が障害者に対して関心を持ち始めたのだと思う。ただ、こういった体験であったり、学ぶ機会というのはその内容によってはもちろんプラスに働くこともあるかもしれないが、かえって誤解を招いたり拒否的反応をもたらすといったマイナスに働くこともあるということを主催者側はよく考えておかなければいけない。障害体験の実施についても同様のことが言えるのである（芝田、1996）。

今回の調査では、視障者に対するイメージや疑問に思うことなどを自由に書いてもらう項目を設けた。そこでは私自身いろんな発見や驚きがあった。その人の意見や疑問というのは少なくとも視障者に关心を持っているということでもある。これらを何らかの形で返すことができればと思う。

今回の意識調査をするにあたって快く協力して下さった明石市立二見中学校と大阪府立山田高等学校の方々に深く感謝申し上げる。

実際にしたことがある 13.8 知ってはいるがしたことはない 19.8

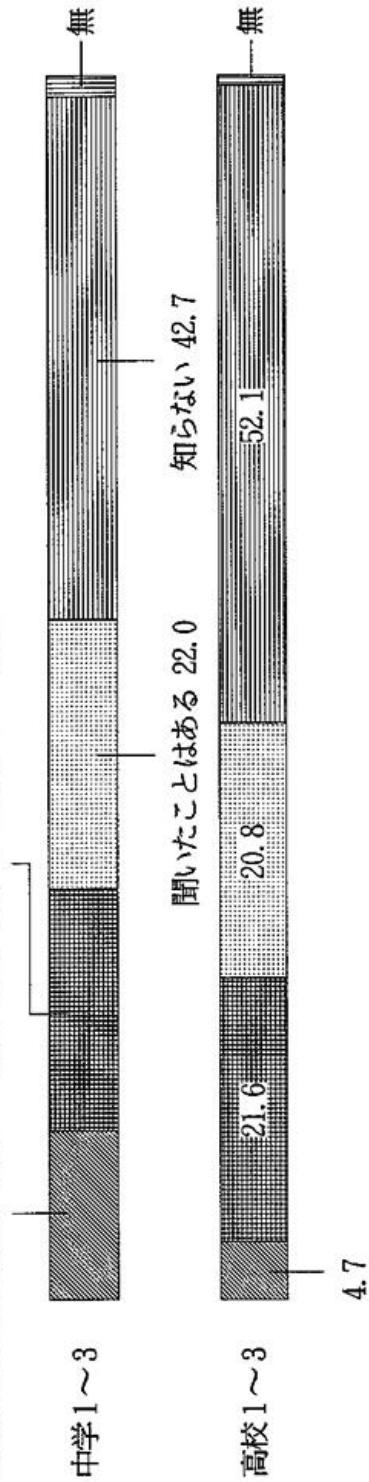


図7 手引きについて

一人で歩けないので、危ないので歩かないほうがよい 8.2

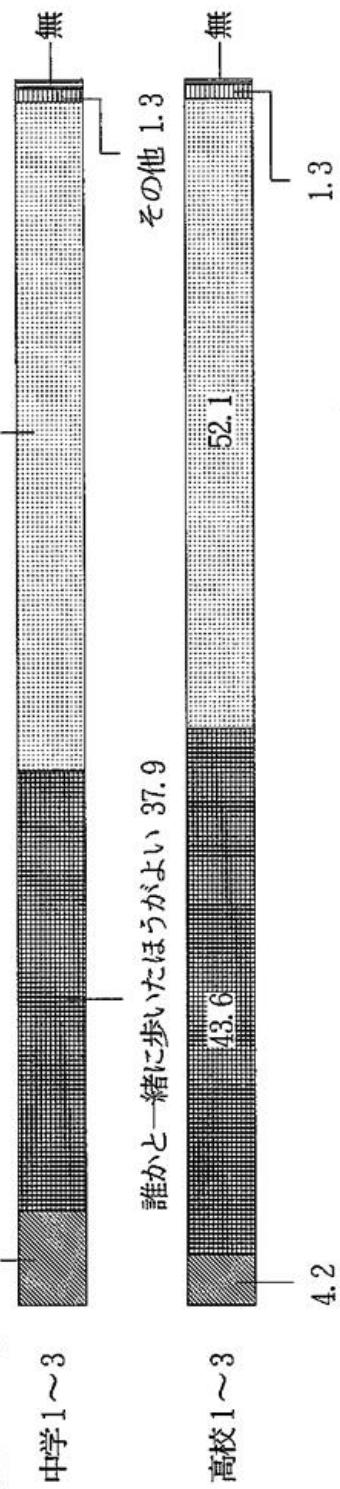


図8 一人で街を歩くことをどう思うか（複数回答あり）

引用・参考文献

- 河内清彦 1990 学生および教師の視覚障害者観。文化書房博文社
- 佐藤泰正 1991 視覚障害学入門。学芸図書。Pp. 92-101。
- 芝田裕一 1996 視覚障害野障害体験実施の留意点。視覚障害リハビリテーション, 44, 77-81。
- 徳田克己 1989 社会の人々の態度を改善するための試み。視覚障害, 99, 5-24。
- 本徳香津子 1994 学生の視覚障害者の歩行に関するイメージ。視覚障害リハビリテーション, 39, 36-57。

(資料: 調査用紙) 視覚障害者に対する社会の意識調査

この度はお忙しい中、本調査にご協力いただきましてありがとうございます。

調査項目は全部で1~10の項目があります。記入方法はそれぞれあてはまるものに○をするか、あなたの意見・状況などを記入してください。

みなさんの率直なご意見を聞きたいと思いますので、できるかぎり率直にお答えください。

年齢 - () 歳 / 性別 - 男 · 女

1. 目の不自由な人（または、視覚障害者ともいいますが）というとどんなイメージ（印象）を持っていますか？
具体的に自分が思っていることを単語・文章、なんでもかまいませんので書いてください。（いくつでもかまいません。）
2. あなたのまわりに視覚障害者はいますか？あてはまるものに○をしてください。

1. 家族にいる。⇒ 祖父／祖母／父／母／兄弟、姉妹
2. 親戚にいる。⇒ 接する機会はありますか？ YES／NO
YESの人はどの程度ですか？（ ）
3. 友人、知人にいる。⇒その人はあなたにとってどういう存在ですか？
例. 親しい友人、たまに話す程度、など。
()
4. 近所にいる。⇒ 話をすることがある。／ 話をすることはない。
5. 街で見かけたことはある。
6. 実際に見かけたことはなく、テレビ、新聞、雑誌、などでしか知らない。
7. その他()

3. 街で視覚障害者に出会ったことがありますか？ YES／NO
YESの人⇒その時、声をかけましたか？YES／NO
YESの人⇒具体的にその内容を書いてください。
()

NOの人⇒声をかけなかった理由は？

あてはまるものに○をしてください。

 1. 困っている様子でなかったから。
 2. 急いでいたから。
 3. 声をかけたかったが、どうやって声をかけたらよいかわからなかった。
 4. 声をかけようとは思わなかった。
 5. その他（ ）

NOの人⇒もし、街で出会ったらどうしますか？

 1. 声をかける。
 2. 困っていたら、声をかける。

3. 声をかけたいとは思うが、どうやって声をかけたらよいのかわからない。

4. 向こうから声をかけられたら、助ける。

5. 声をかけようとは思わない。

⇒理由があれば書いてください。

(

)

6. その他 ()

4. 視覚障害者が使っている白い杖を知っていますか？

1. 実際に使っているのを見たことがある。

2. テレビ、新聞、雑誌などで見たことがある。

3. 聞いたことがある。

4. 知らない。

5. 盲導犬を知っていますか？

1. 実際に見たことがある。

2. テレビ、新聞、雑誌などで見たことがある。

3. 聞いたことがある。

4. 知らない。

⇒1～3の人、盲導犬について自分がそう思うものに○をしてください。

(1)盲導犬がいれば、どこにでも行きたいところに行くことができる。

(2)盲導犬を持つ人が目的地への行き方などをきちんとわかっていないければならない

(3)その他 ()

6. 点字ブロック（これを視覚障害者誘導用ブロックといいますか）を知っていますか？

1. 実際に見たことがある。

2. テレビ、新聞、雑誌などで見たことがある。

3. 聞いたことがある。

4. 知らない。

⇒1～3の人、点字ブロックについておたずねします。あてはまるものに○をしてください。

(1)視覚障害者は、点字ブロックがあれば必ずその上を歩く。

思う／思わない／わからない

(2)視覚障害者は、点字ブロックがどこにあるかよく知っている。

思う／思わない／わからない

(3)点字ブロックがあると、視覚障害者は安全に歩くことができる。

思う／思わない／わからない

(4)視覚障害者に道をたずねられたら、点字ブロックのある場所を教えてあげればよい。

思う／思わない／わからない

(5)点字ブロックをつける基準は全国で共通している。

思う／思わない／わからない

(6)点字ブロックの色が黄色であるのには理由がある。

思う／思わない／理由を知っている／わからない

7. 音の出る信号機を知っていますか？

1. 実際に見たことがある。

2. テレビ、新聞、雑誌などで知っている。

3. 聞いたことがある。

4. 知らない。

8. 右図のように視覚障害者が手引き者のひじの少し上をもって誘導してもらうことを手引きといいますが、あなたは手引きを知っていますか？

1. 実際にしたことがある。

2. 知ってはいるが、したことはない。



3. 聞いたことはあるが、くわしくどういったものか知らない。
4. 知らない。
- ⇒ 1, 2の人、手引きのしかたはどこで知りましたか？
()
9. 視覚障害者が一人で街を歩くことをどう思いますか？
1. 一人で歩けないのだったら、あぶないので歩かないほうがよい。
 2. だれかと一緒に歩いたほうがよい。
 3. 一人でも安心して歩けるようにみんなが視覚障害者を理解して声をかけるようにしていくことが必要。
 4. その他 ()
10. 視覚障害者に関して思うこと、疑問に思うことでも何でもかまいませんので書いてください。(1の内容とかさなる部分があってもかまいません。)

ご協力ありがとうございました。

《インフォメーション4 研究雑誌3 1996年10月～1997年3月》

ヨーロッパの視覚障害者のマッサージ教育に触れて（松浦武）
第14回海外研修報告書 平成7年度（清水基金） Pp.51-71 1997年3月
視覚障害者用の補償機器と雇用（井上英子）
第14回海外研修報告書 平成7年度（清水基金） Pp.131-154 1997年3月
重度視覚障害者ガイドヘルパー派遣事業の現状と支援のあり方（赤塚光子・郷家和子）
研究報告集(26)1996年度版(東京都心身障害者福祉センター)Pp.33-42 1997年3月
障害者援助における現行福祉サービスの適用上の限界－若年高次脳機能障害
者の援助困難事例から－（坂野純子・高田京子・竹中美早・赤塚光子・山本
良典・田代一男）
研究報告集(26)1996年度版(東京都心身障害者福祉センター)Pp.55-63 1997年3月
電子ブックを利用した弱視者（児）の辞書引き作業の研究（株式会社ミカミ）
研究報告集(26)1996年度版(東京都心身障害者福祉センター)Pp.70-72 1997年3月